

文化財第三集

矢部町の民話と伝説

はしがき

矢部町の文化財第三集は「矢部町の民話と伝説」ということにしました。

民話や伝説は、ややもするとただの昔話として片付けられてしまいましたが、よく読んでみると民話や伝説の中から、昔の矢部町の生活を読みとることがができます。昔のいろいろな風習、習慣、あるいは農作業の方法、生活様式などよく知ることができます。

この民話と伝説は、矢部町の古老の方々のご協力を得て作成されたものです。矢部町の古い話を知った人があるとききますと、文化財保護委員会の方が聞きとりに行き、テープをとり、テープをおこして文章にしたものですが、意外と多くの労力を費して完成したものです。

文化財保護委員のみなさんのご労苦に対し、心から感謝と敬意を表するものであります。このようにしてできた「矢部町の民話と伝説」です。よく読んでいただき、また次の世代に語りついでいただきたいものです。

昭和五十六年三月三十一日

目

次

はしがき……………	西田末男		
民話			
赤迫河童……………	1	①	地図
尻をいけたという池尻……………	4	②	
千蛇湖の毒蛇と薬蛇……………	6	③	
単骨部落の名のおこり……………	8	④	
大空武左衛門と角盤の力くらべ……………	11	⑤	
重盛さん参り……………	22	⑥	
新藤の嬢者……………	25	⑦	
力くらべ……………	28	⑧	
力自慢の石かため……………	32	⑨	
三ヶ村の養子取り……………	36	⑩	地図
強力無双の角盤……………	40	⑪	
狐の火とぼしと山ワロの物まね……………	45	⑫	
狐にだまされる横道原……………	48	⑬	
雷の卵……………	50	⑭	
彦三郎と狐のだまし合い……………	53	⑮	
雷石の由来……………	56	⑯	
猪うちの名人……………	59	⑰	
天神森のおさん狐……………	62	⑱	
河童と相撲をとった古閑武義さん……………	65	⑲	
山ワロの話……………	69	⑳	

不思議な話……………	72	<small>地因 巻四</small>
聖観世音菩薩指折れの由来……………	76	22
狐と狼のだまし合い……………	79	23
動物の知恵くらべ……………	81	24
殿様の嫁もらい……………	84	25
仲をおさめた白菊の話……………	26	29
オカ寺……………	91	27
うそころ……………	94	28
猿とカニの知恵くらべ……………	97	29
ねずみ……………	100	30
伝説……………		
京の上臈と女畑……………	104	31
平家の伝説を秘めた内大臣……………	107	32

笈石と菅の由来……………	109	<small>地因 巻四</small>
御所塚……………	113	34
大矢山……………	115	35
成君の逆棒……………	116	36
日暮崎・稻生原・男成の由来……………	118	37
梅木にあった駆込寺……………	120	38
弘法大師杖立の井戸……………	123	39
柚木についての伝説……………	126	40
鬼がきて廻す巡石……………	128	41
小松の塔……………	130	42
千人塚……………	131	43
あとがき……………	132	

赤迫の河童

むかし、麻山部落に彦八さんという人がいました。この人は大変まじめで、人との約束をよく守る方でした。

彦八さんはお盆が近くなったので、ある日馬をひいて浜町に買物に出かけました。当時の道は御岳山の麓を通っていましたが、この道路の下に大きい「赤迫の堤」があつて、沢山な河童がいて、道を通る人にいたずらをして困らせていました。

彦八さんが堤のそばを通りかかると、五、六人の子ども達が出てきて

「彦八さん、あんたはどこに行くかね」

と尋ねました。彦八さんは

「ああ、赤迫の子ども達かーお盆がすぐくるけん、買物に行きよつとたい」

と言ったら、子ども達は

「彦八さん、今日は相撲とつて遊ぼう」

と近寄ってきました。

彦八さんは

「今は駄目ばってん、帰りならよかろう」

と子ども達と約束しました。

彦八さんは浜町に行つて、家族の下駄や手ぬぐいを始め食料品などを買って、最後に酒屋に入つてゆきました。そして、茶わんに一杯の酒を持って軒先に出て、

「赤迫の水神さん、ここからお神酒を差上げます」

と言つて頭を下げ、道の真中にサーッと流しました。

当時水神さんなどには、どこからでもお神酒を上げると、とどくと信じられていました。そして、彦八さんは買物を馬に積んで今朝来た道を通り、赤迫の堤のそばに馬をつなぎ

大きい声で

「おおいー赤迫の子ども達よー今朝約束したこつ今から相撲とるぞー」

と二、三回叫びました。暫らくして、一人の子どもが真赤な顔をして出てきて

「あんたがさつき、酒をのませたけんみんな酔^ようち、寝てしもた。今日は相撲はとれん」と言つてどこかに消えていきました。彦八さんは

「そうか、そうか」

と言つてほほえみながら、馬のたすなを握り、河童達からいたずらをされずに、無事に帰りました。



尻をいけたという池尻

むかし、赤迫の堤のそばを一人の旅人が通りかかりますとすばらしい美人が出てきて

「旅のお方、ちよつとお願いがございますが」

と近寄ってきました。

「この手紙と包を井無田（清和村）の池に投げこんでください」

と頼んで、たちまち何処かに消えてしまいました。

驚いたのは旅人です。世の中には又不思議なこともあるものだと思つて、恐る恐る手紙と包を持って池尻村まできましたが、どうしても不安でたまりませんので道ばたの石に腰をおろして手紙を読みました。

「自分は今まで九百九十九人の尻を抜いたが、千人の尻を取るには今一つ足りない。幸

「この手紙を持ってきた旅人の尻があるから、お前が抜いて千個の尻となしてくれ」と書いてありました。

読み終った旅人は、飛び上って驚きました。赤追堤の河童から井無田池の河童にあてた手紙でした。旅人は直ちに手紙と包をなげすてて、河童に尻を抜かれないうようにと土の中に自分の尻を埋めて、からくも生命を取り止めたそうです。

その後、土地の人達が「尻をいけた」ということで、いけ尻と名がつけられたそうです。それが今の池尻部落です。

(語り手 本田 収)

千蛇淵の毒蛇と葉蛇

千蛇淵は川野部落の東を流れる大矢川にあって、よどみは深く大蛇の穴という大きいものがありました。又その付近に、千年以上もたつ大杉がうっ蒼と茂っていました。

むかしむかし、この千蛇淵に千匹の大蛇が棲んでいました。この大蛇達は、食物を求めて付近を歩き廻って、満腹になると淵からのそりのそりとはいあがり、百米ばかり離れた千本杉に集ってきます。そして、千本の杉に千匹の大蛇が巻きついて日なたぼっこをしていたという。まことに昔でないか決して見られない壮観でした。

しかし時代がたつにつれて、どうしたことか千匹の大蛇が、一匹、二匹と減じて遂には二匹の大蛇になってしまった。この大蛇の中で一匹は葉蛇で、一匹は毒蛇でした。葉蛇の方は絶えず川の方に薬を流し、一方の毒蛇は毒を流していたという。



毒蛇の流した毒は、薬蛇の流す薬のため
に絶えず消されていた。そのお蔭で下流に
いる魚類も周辺に住む人達も毒にあてられ
ずですんだという。この二匹の大蛇は現在
も岩穴の奥深くに住んでいるということ
です。

鼠骨部落そぼねの名のおこり

むかし、むかし、阿蘇大明神が矢部地方を巡視された時に御岳山の麓を通過して、鼠骨部落そぼねに着かれたのが昼頃でした。大明神は広々とした草原の中に、どっかと腰をおろして大きいにぎり飯を出して食べ始められました。

暫らくして、足の先を「コッ、コッ」とつつくものがいます。一体何だろうと思ってよく見られると、小さい野鼠ねずみが大明神の足元に立っています。身振り素振りからして

「私にもにぎり飯を分けてください」といっている。

「ねずみも腹がすいているとみえる。はいこれを上げるよ」

と言って、食べておられたものを割ってやられました。ねずみは大変嬉しそうに二、三回

「ビイ、ビイ」と鳴いて、何処にか行つてしまいました。

まもなくして、五、六匹のねずみが出てきて大明神の前で

「ビイ、ビイ、ビイ」

と鳴き廻るので、とうとうまた半分程のにぎり飯をやつてしまわれました。

「ああ、にぎり飯をやり過ぎた。少しひもじいけれども我慢しよう。ねずみも同じ生き物だ、にぎり飯をやった時のあの嬉しそうな素振り、今日は良いことをした」と独りごとを言いながら、井無田原の方に行かれました。

そして、予定のところを巡視され陽が西の山に傾く頃もときた道を通つて、すねぼね嶺骨にさしかかられると、急に周囲が物さわがしくなりました。

「何事かある」と直感されて周囲を見廻されると、前の方から一陣の風がサーッと吹き通り、真黒い煙が立ちのぼり、真赤な火炎が物凄いい音を立てて大明神を取巻くように迫ってきます。

これはきつと、このあたりに住む悪質な土族の仕業と感じられた。この広大な草原で火に包まれては防ぐ方法がないと思われて、岩蔭の所に身を伏しておられました。すると物

凄^{しみ}い熱風がうなりながら、大明神の頭を通ってゆきました。

それからどれだけ時が過ぎたかわかりませんが、大明神が気がついてあたりを見られると、一面が真黒な焼野原と化しています。

「こんなひどい野火によくも一命が救われたものだ」

と独り言をいって路の方へと歩いてゆかれると、不思議なことに真白いものが点在しています。近寄ってよく見ると、それはなんとねずみの骨でした。

これは、昼頃ににぎり飯を貰ったねずみ達が大明神の難を知り、昼間の恩返しと一族が集って、土族が放った火を返し火をして身辺を守ったために、火炎に包まれて焼死したものでした。

鼠骨^{ネズミ}という名の起りは、こうした由来によるものです。



大空武左衛門と角盤の力くらべ

一、豊年子の乙松

「戸屋尾の乙松は太かばい」と乙松の豊年子（なみはずれの大きい子）振りが評判になりはじめたのは十才位の頃で、背丈も五尺五寸（一米六六釐）に伸びていました。

戸屋尾は、田所村の枝村で緑川のがけべりの棚田と、畑を耕作すると七戸ばかりの貧し村でした。

その村の太治右衛門さんの四男坊の乙松が、その豊年子でした。田所村の正因寺の坊守さんが、一間もあるお寺のへい越しに、柿を採っている子供がいたので、大声で叱るとはしごを踏みはずしたら大変と思ひ、外に廻って見ると、大きな男が柿を取っていました。これが乙松で、軒先につるしてある干柿をとったり、戸口上の鶏屋の卵をとったりして、



大男でなければ出来ないはずらをして、人々を驚かしていました。

十五才頃には、身丈も六尺五寸（一米九六釐）以上になって力も強く、緑川の勤場や津留村で、菅や目丸から切り出された材木の管流し（ふながし）の集材や、いかだ組の仕事で二人分の賃金をもらっていました。

ある夏の頃、肩まで水に入っていかに組をしていた時に、いかだ師が手伝いするつもりで飛込んだところが、背も立たない深みでおぼれかけたのを、えり首をとらえていかだの上におしあげたそうです。

二、武左衛門と名乗る

六尺七寸もある大男が、何時までも幼名の乙松でもあるまいと、十六才の兵子（へこ）祝を機会に武左衛門と名乗りました。毎日の労働で体もたくましくなりましたが、いたずら気は抜

けず、折角八朔祭を見物に行つて二階ばかり見て帰り母親に

「八朔祭はなかつた。二階で昼寝どんしとらしたバイ」

と言つたという。又、浜町に買物に行つて、二階の戸をたたいては店の人を仰天させたりしてました。

ある日、浜町へ行く途中に小原村で道をふさいでいた牛を、引直すのも面倒と思ひ、ひよいと牛をまたいで通つたので、見ていた人が驚きました。この話が広まって誰言うともなく「牛股武左衛門」と言うようになりました。二十才頃は上背が七尺（二米一二匁）を越えて、力は強いし矢部で相撲に勝つものはありませんでした。

鳥追ひ、亀つるし、ちようちんつぶし等四十八手にもない珍手を、得意としていました。鳥追ひというのは、押出す時に普通指は上を向いているが、武左衛門の押出しは背が高いので指を下にして、一尺二寸（三六匁）もあるうちわの様な手の平であおぎ立てるので、その名がつけられたそうです。

亀つるしは、組付かれて長い腕で後から櫛をつるし上げると、相手は亀の様に手足を動かすので、この名がつけました。

ちようちんつぶしは、相手の肩に手をかけて、長身と体重でちようちんを畳むようにおしつぶすわざです。

武左衛門は、このような珍しい相撲を取るので、大変人気者でした。

三、山田村の角盤

丁度その頃、山田村の百姓弥助のせがれで、覚助というものがいました。身丈は四尺三寸（一米三〇釐）の小男ですが、肩幅三尺（九〇釐）という珍しい体をしていました。

覚助さんの相撲の仕切姿は、体が四角で手足が短いので、まるで碁盤を据えた様なかつ好で、誰言うもなく、角盤と呼びそれが四股名しこになりました。

角盤は相撲が上手で、どんな大男にも低い体を潜り込ませて、ひっくり返すのが得意でした。

十二月二十日頃でした。今日は山田村の年々米を納める日です。村の人達はそれぞれ割当てられた米を牛や馬に載せて出かけました。弥助さんも牛に米俵を二俵載せて村はずれの土橋を渡っていた時に、犬がほえたので驚いた牛が暴れて、土橋を両足共踏み抜きました。

重い米を載せたままの踏抜きで、牛の腹が橋の上につかえて後足が宙になって、どうもがいても橋の上にはあがれません。村の人達が集って、牛の背から米はおろしましたが、牛だけはどうしてもだめです。

それで、丸太を持って来て、牛の腹の下に入れて左右からかかえようと思いますが、狭い橋の上ですからそれも出来ません。

近くに仕事をしていた覚助さんが、使いの人からこの話を聞いてとんで来ました。そして泡を吹いて白眼をむいて興奮している牛の首をなでてやりますと、少し落ちついてきました。

それで、家から持って来た厚い板の上にカマゲをのせ土橋の下に降りて、厚い板を自分の背に乗せて、宙になっている牛の足の下にもぐり込みました。

牛も足がカマゲの上に乗るとさわがなくなりました。頃はよしと、覚助さんが「うーん」と下から腰を伸ばして持上げますと、八十貫（三百斤）もある牛が次第に上り背中の板が土橋のけたにつかえるころになると、覚助さんの合図で弥助さんが「ハイッ」と手綱を引くと、牛は何事もなかったように踏出して橋を渡りました。

これを見ていた村の人達は、覚助さんの強力と牛をいたわるやさしい心根に拍手かっさいをしました。

覚助さんは二俵の米を背負うと

「親父さん、年ぐ米はおれが納めて来るけん、牛はひいてもどんなはり」

と言って、村の人達と一緒に会所に納めに行きました。

覚助の強力は、矢部中の評判になりました。それが何時の間にか「山田の角盤は牛をかたげたゲナ」と誤り伝えられました。

四、武左衛門と角盤の力くらべ

武左衛門の相撲は大男でなければ出来ないわざ、角盤は小兵でなければ出来ないわざで、両方共に身体的な長特長がありますが、まだ取組んだことはありません。

矢部中の相撲好きの間で、どちらが強いか話題になるにつけて、お互いも力くらべをして見たいと思うようになりました。

ある日、角盤が力くらべをしようと、戸屋尾村に行きましたが、武左衛門は勘場に仕事に行つて留守でしたので仕方なく帰りました。

翌朝、村の人が天神様にお参りに行きますとなんと、お宮が背をむけています。びつくりして早速板木をたたいて村中の人達を集めて、半日もかかってお宮をもとの位置になおしました。

「これはきつと、内大臣の馬子岳の天狗の仕わざバイ」

と村人は話していましたが、武左衛門は角盤が来てやったことがわかりました。

その翌日、今度は山田村の人達がびつくりしました。朝早く村のおばあさんが、観音さんにお参りに行って手を洗おうとすると手洗鉢がありません。はてなと見るとお堂の横にある板の枝に、三十貫（一一二軒）もある手洗鉢がのせてあります。ここでも板木をたたいて村人が集められ、半日かかりで手洗鉢が元のところにもどりました。

山田村では、これはきつと甲佐岳の天狗さんの仕わざと恐れていましたが、角盤は、

「武左衛門がやったなあ」

とわかりました。

それから四、五日たって、角盤が又戸屋尾に行きましたが今度も武左衛門が留守でした。仕方なく帰り小原村まで来ますと、五老ヶ滝にゆく道端の六地藏が目につきました。

「よし、この笠石を下して、おれが来たしるしにしておこう」と笠石の三十貫（一二二粒）ばかりをおろしている時につい手がすべて笠石を落し、その隅を欠いでしまいました。

「ホイ、しまった」

と誰にも見付からぬように、急いで帰りました。

小原村の人達がこれを見付けて、大騒ぎしていました。町からの帰りにこれを見た武左衛門が

「角盤がやったなあ」

とわかりましたが、誰にも話さずに一人で笠石を元のところにのせて帰りました。

このことがあって三日ばかり後の朝、山田村の庄屋、三郎助さんが庭に出て何気なく見ると、昨日もみすりに使用したもみすりうすと「えんぶり」とが乗せてあります。びっくりした庄屋さんは早速村人を集めて、足場を作りやつのことで、軒先からおろしました。

「甲佐岳の天狗様も近頃はよくいたずらしなはる」

と村人達はぼやいていました。

角盤はこの手伝いをしながら、

「武左衛門やったな」

と思っていました。

それから、何時とはなしに二人の力くらべのことが、矢部中に知れわたり評判になりました。

十二月もなかばを過ぎると、方々の村から年々を納める人や牛馬で会所は、ごったがえしています。

ある日、会所から呼出状が来ましたので、何事であろうと恐る恐る行きますと、角盤も来ていました。

やがて呼び出されて会所の広庭に出ますと、正面に惣庄屋の布田太郎右衛門が苦りきつた顔で坐り、その左右に手代、小頭、書役、肝入等の村方役人がざらりと列んでいます。

惣庄屋が

「その方達は力くらべに神様、仏様のお宮や手洗鉢を勝手に利用して、村人に迷惑をかけたること不届千万である」

と二人は大変しられました。そして今日、会所の庭で力くらべをするよう命じられました。

やがて会所の大木戸が開かれると、知らせがあつたとみえて町の人達が、二人の力くらべを見ようと、どつと入って来ました。

先づ武左衛門から始めました。背中に米二俵を綱で背負い両手に一俵づつさげて、のっしり、のっしりと広い庭を一周しました。米俵の重さ十六貫（六〇斤）大変な力で、見物人達は大かっさいをしました。

次ぎは角盤ですが、倉庫の大きいかしのかんぬきを持ってきて、両端に二俵づつくりつけて、ひよいとなつて広い庭を一周しました。

今までじいつと見ていた惣庄屋は、

「二人共見事であつた。勝負なし引分け」

と判定を下しました。そして

「二人共、力くらべで材に迷惑をかけた料（料）により、本日納入の年々米の倉庫入れを命ず

と言渡して、ニヤリと笑いました。

武左衛門と角盤は顔を見合せて、ヤレヤレと言う顔をして立ち上がり、納入された年々米百俵ばかりを、夕方までにお蔵取めをしました。さすが強力無双の二人共、ヘトヘトになりました。

この力くらべがあつてから、二人は大の仲よしになりました。二人の取組はとうとう見ることが出来ませんでした。それは、お互いの力をよく知っていたからです。

(語り手 井上清一)

重盛さん参り

むかしむかし、矢部手永惣庄屋の矢部勘右衛門重元は手永の村庄屋七十六名の前で

「皆さんに今日は是非協力してほしい相談がありますが」と言つてひざをのりだし

「庄屋さん方も気づいておられると存ずるが、矢部の村々は山に囲まれているので、縁組もその谷間で行われているのが多い。即ち縁者結婚が多くなつていて、いろいろな欠陥が現われている。初種子も他の地方と交換すると、品質も収量も多いというから、若人の結婚も広い範囲で行うようにしては如何でしょうか」

この話を聞いて、庄屋さん達もうなずきました。勘右衛門さんはさらに話を続けて「そこで庄屋方、結婚するには若人達がお互いに知ることが大切であるが、何か妙策は

ありませんかな」

と相談をもちかけました。

いろいろ協議の結果、四月四日内大臣の重盛神社の祭札に若人達を参拝させようということになりました。

村の庄屋さんが激励し、父母が協力することで重盛さん参りが大賑いとなりました。

朝早くから各部落の若人達が、五、六人連れで楽しそうに話しながら歩いて行く。後から他部落のものが追いつき、一緒になったり又おいぬいてゆく。道路という道路は若人の列となりました。

若い人は敏感なものです。何時とはなしに牛は牛連れ馬は馬連れになって話はずんでききます。

いよいよ津留の岩丁場を通り、勘場の堂免から急な坂道を中尾、大平へと登り、鴨猪の尾根を経て重盛神社へと行きます。

「あー疲れた」

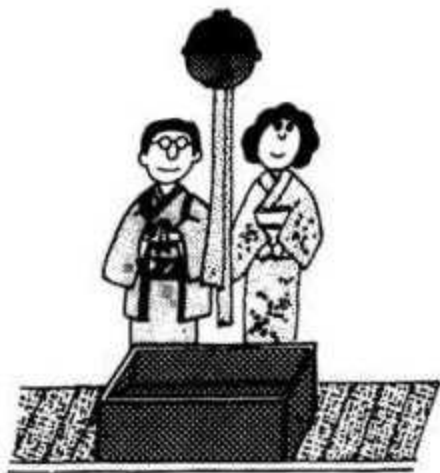
と女性が訴えると、早速手を引いてくれる若い男の姿も見られます。

先ず手を洗って身を清め、拝殿の鈴をならし心をこめて祈願をします。神社のすぐ下には広場があつて、矢部の各村からは勿論のこと、菅尾、馬見原や砥用方面からの若人達が集つて大にぎわいです。

こうして重盛さん参りが縁となつて、他村との縁組が多くなりました。

「お蔭様で私達は結婚しました」

と翌年には、重盛神社に新婚夫婦は二人揃つて「お礼参り」するのが風習になりました。



新藤の嬢者^{じょうもん}

新藤には笠月というところがありますが、昔はこの村の道路両側には大木が繁っていて、昼間でも薄暗い程であった。特に雨の日などは行き来する人の傘と傘とが突き当って初めに挨拶をするということで「傘突き」から笠月になったという。

これは少し真実性がないようです。

夏の夕刻に俄雨にあい、笠をさして帰っていたら雨もやみ、ふと東の空を眺ると、清く澄んだ月が昇っている。じいっと立ち止って月を見る。ここを笠月と名づけたという。誠に自然の妙味が詠める風雅な人がいたことがうかがわれる。笠月の名の由来は後者である。

この笠月と於村、南とを合せて新藤村と言いますが、湿田が多くて大変苦勞するところ

でした。

四月頃になると村一斉に田打ち作業が始まります。何しろひざまで没する湿田なので、牛で耕すことが出来ませんから、人が蹴で打ち起きなければなりません。この作業を「田打ち」といって、どこの家でも一週間位は続けなければなりません。

この仕事は大変な重労働でしたから、他村の娘さん達では「新藤に嫁ろか、げずの木に登ろうか」のことが使われたそうです。

又農事の仕事が厳しい反面に、すばらしい体力と意気旺盛な娘達が育ちました。そして美人が多いということで、他村の若者がよく訪れました。

昔、若い人達が他の村を訪れる時は、先ずその村の若者頭に酒を持って挨拶に行きます。すると男女を集めて相互に紹介した後、懇親会へと進んでいきます。

この村を訪れた若者は、その内に気の合いそうな娘さんのところにいつて話しかけます。酒をすすめ密談へと考えていたがこれは驚いた。酒はぐいぐい飲むし、鼻息がだんだん荒くなって、遂に手拍子で歌い出しました。

この氣勢に圧倒されて、すごすごと帰ってしまったということでした。

こうした状況を誰かが作詩作曲したのが「新藤女もんさん」の民謡で、多くの人々に歌われ親しまれました。

一、新藤嬢者じょうもんさんにや

酒こちやあわん

飲んだあがりに

横手打つ

二、新藤五百石

すずめまでおどか

村の嬢者じょうもんは

まだおどか



力くらべ

むかし、むかし浜町に体が大きく力の強い寅八という人がいました。何時も人の前で自分の強いことを威張るので仲間から嫌われていました。

ある日、仲間のうちで知恵のある大助というものが、この寅八をやっつけてやろうと思つて

「あんたは、御岳の聖滝に河童がおる話だが、そるば退治しきるか」

「河童か、そんなやつ、わけはなか」

二人は言い合いながら約束をして、別れてゆきました。

早速寅八は翌日、犬を一匹殺しその肉を持って、聖滝に行きました。一方大助も気になるので、見えかくれに後をつけてみたらこの様子です。それでこつそりと滝つぼに下って、

木の蔭にかくれていました。

寅八は着物をぬぎすて、荒縄で犬の肉を結んで腰にさげて、滝つぼに飛び込みました。そして大声で

「聖滝の河童出てこい、おれが退治にきた」

と呼び廻りました。

木蔭で見えていた大助は、この時ばかりと水底にもぐって、寅八が腰から下げている犬の肉を引張りました。

不意をつかれた寅八は

「姿も見せずに、下から攻めるとは卑きようだぞ」

と叫びましたが勝負は既に明白、岸にあがってすぐ帰って行きました。

その二人の青年は、町中でばったりと出会ったので、大助が

「聖滝の河童は退治したかい」

「ああ、昨日おれが行って探したが、河童が恐れて逃げてしもうた。残念で堪らん」

相変らずごうまんな態度です。大助はもう一度鼻をへし折ってやろうと思って、すばやく

話題をかえて

「おれは二、三日前、隣りのおじさんから聞いたが、津留の猿ヶ城にや天狗が出るげな、いくらお前でも天狗は退治できみやあ」

「そんぐりや、手間暇いるかい」

相変らずの豪傑振りです。

つぎの日、寅八は天狗の服装に一本歯の下駄をはいて浜町から白石村の岩丁場まで、どつしり、どつしりと歩いてゆきました。そして大きい声で

「ここに天狗がいると聞いたけん退治にきた。いたら出てこい」

すると岩蔭で、今かと天狗の服装をして待っていた大助が、すうつと出てきました。

「はーはーこの天狗か、よし、おれのまねをしてみろ」

と目の前にきりたつた猿ヶ城の頂上に、死にもぐるいで登りました。そうすると大助天狗は、身軽に頂上へ登ってきました。

「お、これはこしやくな」

寅八は烈火の如くに怒り、頂上から緑川の方に斜に伸びている松の木の先端によじ登って



「ここまではどうじゃ」

と小笑いしていましたら、大助天狗はすうっと飛び上がって寅八天狗の足にぶらさがりました。自分の体重を持ちこたえているのにやつとなのに、人の体まではたまりません。全身から落花生のような汗が流れ出しました。

さすが豪傑の寅八も遂に

「参った、参った、許してくれ」

と降参いたしました。勿論寅八も相手の天狗が大助であることを知りました。

こうしたことがあつてから、二人は仲の良い友達になつたそうです。

(語り手 森下太喜夫)

力自慢の石かため

万坂村の大日如来さんの祭礼は、毎年一月十五日に行われていますが、大日堂のすぐそばに力石が二個あって矢部郷の各地から参拝に来た若者達はその石で力くらべをするので、大変評判になっていました。

ある年、白糸の若者が五、六名連れだつて大日さん参りをしましたら、若者達が既に七、八人でこの石に挑戦しています。

石をかつぐことには慣れていないとみえて、なんとなく恰好がよくない。この姿を横目で見ながら大日さんに参り、牛馬の安全を祈りました。

ほどなくして帰ってきましたと、さっきの若者達は一人も石をかついだ者がいない様子で、かわるがわるに石にいどんでいます。

白糸の青年達は、暫くたたずんで様子を見ていましたがたまりかねて

「あんた達のからだなら、この石はわけはながな」

と問いますと

「ぞうたんのごつー この石は百斤位あつとぞ、まだこの石をかためたもんはおらんとぞ」

と目を三角にして言います。

なるほど、丸型の石で手のかかりにくい砂岩です。

しかし倒してよく見ると、一か所だけ手のかかる所があります。

「あんた達のからだなら、この石は肩に上がるがな」

と言うと、相手の青年達は怒り出しました。

「よし、そんならこの石をかためたら酒三升買おう」

とつつかかってきました。

この様子に何時とはなしに、往来の人達が立ちどまって決戦如何にと座り込んで観戦しています。

白糸の若者は、付近の家から仕事着を一枚借りてきて、一番背の低いものから力石にいでみました。

石かための秘けつは、石を膝の上にあげて両手で肩におし上げなければなりません。胸のところまで休んだり、ゆすったりしたら石はだんだんとさがってしまいます。

白糸の人達は、通潤橋の水路工事が毎年あるので石を扱うのは心得たものです。

さて、一番目の人が石に手がかりを見つけたのか、「よい」とかけ声をかけて石を膝に上げて、全力で石を両手で肩におし上げましたら、ちょっと足場が悪かったのでしょうか、石は肩を越して後にどんと落ちました。石が肩を越したのは、かついだのと同然というこゝとで、二番目が始まりました。

この人は、背は低いがちりしています。こんどは足場をよくかためて「よい」の掛声と共に大きな手の平をびったりと石につけ、一気に両手で肩におし上げました。

観衆の中から「これは見事」と拍手がおくられました。

「今度は俺かな」

と言いながら石の前に出た人は、背はそう高くないが筋肉隆々の人です。二人が既に成功

しているから自信たっぷり様子です。暫く石の顔を見ていましたが、胸のどのあたりに石をつけるかを見定めたのでしよう。「よい」の掛声と共に、石をうまいぐあいに胸まで上げ、一気にかつきあげて観衆の前を五、六歩あるいて、大地も砕けんばかりになげおろしました。

この三人の様子を見て「酒三升」買うと約束した若者達は顔が真青になりました。

六名のうち、からだの小さい三人が見事に石をかつき、残りの三人は六尺（一、八米）豊かな大男です。これ以上ここにはどんな難題をふきかけられるかわからないと思つたのでしよう。大急ぎで酒三升買ってきて、どこかへ消えていきました。

実のところ、この六人も前の三人が石かための名人で、残りの三人は大力はあるが、石扱いは不得手だったそうです。

冬の日短い。夕日が万坂峠に傾く頃に六人の青年達は、懸賞品の酒三升樽をさげて、意気揚々と家路へと急ぎました。

三ヶ村の養子取り

昔、三ヶ村の庄屋さんの家に、とてもきれいな娘さんがおりました。一人娘なので養子をとらなければならぬが、どうしてむこを選ぶうかと、父親の庄屋は考えていました。

そしてある日、村内に次の様な立札を立てました。

「私と話を二荷ふかした者は、うちの娘の養子にする」

ということでした。さあ—大変な騒ぎとなりました。

庄屋さんは、当時村の最高位の人で住居も大きく、そして娘さんが絶世の美人ときいてるからたまりません。

付近の村からは勿論のこと、矢部から御船までの青年達がこの金的を射止めようと、毎日黒山のようにおしかけました。

しかし、くる人もくる人も庄屋さんと話して「一荷」の話も出来ないで、頭かきかき帰ってゆきました。

一荷の話というのは、話の内容を荷物にたとえたもので重い荷物を前と後にして天秤でなうように!!即ち豊富な話が出来るといふことです。

さて数日後、一人の浪人風の武士が訪れました。

「たのもうー、拙者はこの村に立つている表札を拝見いたしたが、あの文句に相違ござらんか」

と庄屋さんに尋ねました。庄屋さんは

「はい、私と話を三荷された方ならば、娘の養子にいたします」と答えました。

さあ、両人は問い合せて話を始めました。

庄屋さんは



「先づ第一の話は、何からされますか」

といわれて浪人は

「天と地の話はどうか」

庄屋「なるほど—それでは天秤てんびんはどうか」

浪人「雨ではどうか」

庄屋「これは結構ですな—第二の話は何をなさいますか」

浪人「海と山の話はいたそう」

庄屋「天秤てんびんに何にされますか」

浪人「その天秤は、大地では如何であろうか」

庄屋「これは見事ですな—それでは第三の話は何にされますか」

浪人「左様、娘さんと拙者せつしやの話は如何でしょうか、天秤の話はもうせんでもよいだろう」

この話をして庄屋さんは

「私はあなたの才知に負けました。約束通り娘の婿むこになってください」と頭を下げました。

美男で才知のある武士に、娘とて何の不服がありませんよう。二人は仲の良い夫婦として幸福に暮したそうです。

(語り手 松本久蔵)

強力無双の角盤

むかしむかし、山田村に角盤という強力無双な若者がいました。身の丈は四尺三寸（一・三米）に肩の幅が四尺もある頑丈な体つきで仕事をするときたはずれのことをして、人々を驚かしていました。

ある日父親が

「角盤、うちもはよう刈敷を切つて田ん中に入れにやいかんばい。よそはもうしまわしたばい」

とやかましく言いますが、角盤は平気なもの、どこ吹く風と聞きながしています。

ところがある日のこと、鎌を持って出て行きました。そして昼頃に大きな丸太の担い棒をなげました。

「ドーン」という大きい音に驚いて母親が庭に出て見ると、角盤が鎌を持って立っています。母親が

「鎌ば持つとるが、なんばしたつね」と尋ねますと

「草ば一荷切つて入れて置いた」と答えました。母親は、

「あの田にやね、昔から十五荷入れにやんとぞ、それに一荷とは話にもならん」と叱りましたが、気にもなるので急いで見にいきました。七畝位の田の真中に、孟宗竹を

二つに割つていなじに使い、草をくびった束が小山の様に二束入れてあります。これを見た母親はびっくりして

「こりや、わたしの手にやおえん」

と言いながら急いで家に帰り、父親と共になたを持ってきて、孟宗竹のいなじを切ります



と、激しい音をたて水田一面に刈敷がちらばって、手をかけずにすんでしまいました。

現在山田の堤のすぐそばに「角盤の一荷せまち」と名のついた水田が残っています。

秋の稔りをむかえ角盤の家も扱すりをするというのに、縄が少しもありません。

父親が再三叱りましたら

「縄なら昨日、田んぼにぬうて置いた」

と言うので見に行ったら、山の様に水田に積んでありました。

普通の人が縄をなうには、わらをすぐつて束にして、それを木づちでたたいてやわらかくしてなうのですが角盤は腕の力も強いので、わらこづみから引き出し引き出しなうので、その早さは普通の人とくらべものにはならなかったそうです。

冬になりますと農家も暇になりますから、角盤はかごかきをやりました。元來かごは、二人でかつぐものですが、角盤は一人でかつぐ独特のもので、それはかじ棒を長くして、後にかごを着け先端に十五貫（五六斤）位の石を下げて、その中に入っただかつぐのです。「角盤の一人かご」といって当時評判になりました。

ある日、一度角盤のかごに乗ってみたいという人が浜町から乗って水の田尾を通って御

船町の八勢の眼鏡橋まできましたらかごやの角盤が

「お客さん、一寸休みますよ」

と言つて橋の外にかごを突出し、かじ棒を石の欄干にのせて片肘でおさえ、片手で煙草のみ始めました。

一方かごに乗っているお客さんは、急に川音が聞えてきたので不思議に思つてかごの窓を少し開いて見たらこの有様

「かごやさん、こりやーあぶない、早くかごをかついでくれ」

と涙ながら叫びましたが、角盤は平気なもの、ゆっくりとかごをかついで茶屋の本へと走つて行きました。

茶屋の本の道端に地藏があつて、笠石の重さが三十貫（一一二斤）余あります。角盤はここにくると必ずといつていいほどいたずら気が出て、この笠石を下して行きます。

「又角盤が来たな」

と言つて女力士が上げていたそうです。この人は力が強くて、台所のそうじをする時に米俵を左手で軽く上げて、その下をそうじするという大力だったそうです。

このように力くらべをしながら二人は一度も会うことはありませんでした。

(語り手 藤川 繁)

狐の火とぼしと山ワロの物まね

昔、芦屋田の裏山に、狐と山ワロがいて、いろいろ不思議なことをして、人々を驚ろかしていました。

秋の晴れた夜、木立と原野のきわに、不思議な火が一行にトロ・トロと長く広がってゆきます。そうする中に二、三ヶ所に分かれていつて消える。又トロ・トロ・と広がっていつては分かれて消えてゆく。こうしたことが三十分から一時間位続きます。

これを見た人が大変不思議がって、古老にたずねてみましたら

「あれは、狐の火とぼしたい、今頃風のない晩によくやるもんな」
と教えました。

又山ワロは、とても物まねがじょうずです。山ワロというのは、河童が秋になると山に

住むので、その名がつけられました。

秋になると、農家は粟を収穫しますが、ここには夜になって粟の収納をするものがいま
す。

振子で、二、三人が掛け声まじりで

「バツタ、バツター」

と音をさせながら、粟を打ち落します。

ある夜、木を切る音が聞えてきます。

「ゴツシン、ゴツシン」

よく切れるのこぎりの音、やがて矢じめの音、

「クワン、クワン」の音がすると「ワリーワリー」

「バータン」と木が倒れる。

こんな暗い夜に木を切るとは、よほどの山師だろうと不思議に思って古老にたずねます
と

「山ワロどんの仕事たい」

と平気なものでした。

翌日、早速昨夜音のしていた山に行つて見ましたが、木を切り倒した跡など全然見当り
ませんでした。

こんな話をよく聞いたのも、今から六十年ばかり前のことでした。

(語り手 藤川 繁)

狐にだまされる横道原

川島村から一ノ瀬村に行く途中に、横道原という所があつて、雑木林が繁つています。ここを人が通ると昼でも夜でも、古狐がだまして大変困らせていました。

むかしある人が、一ノ瀬村の親類の家に行つて酒をご馳走になつて、よい気分になつて月明りの夜道を帰っていました。

横道原の付近にきましたら、綺麗な女が二人出てきて

「もしお兄さん、今頃何処まで行きなはるか」

と問いかけました。

「わたしやな、川島に帰りよつたい」

と答えますと

「あーよかった。私達もそこまで行くところですよ、それでは一緒に」と左右に分かれて手を取りました。

両手に花とはこのことでしょうか。一杯気げんで引かれるままに歩いていたら、サラ、サラと川の流れる音が聞えてきます。こんなはずはないが、はて、ここはいつたいどこだろと気づいてみたら、こわ如何に、いままで両方によりそっていた美人の姿は何時の間にか消え去って、川島どころか、全く反対方向である一ノ瀬川の上流にきていたそうです。

又ある酔っぱらいが、昼間にソバ畑の中を着物のすそを腰までまくり上げて、とことくと歩いていきます。

それを見つけた人が

「あんたはなんばしとるかな」

と尋ねますと

「ここは川だるけん、尻をからげて渡っているところたい。流れが急でやりきれん」とその素振りには笑いもならぬ様子だったということです。

(語り手 山村 恵)

雷の卵

昔、矢部のある所に、清太じいさんと言って大変りょうな人がいて、いろいろ話をして村の人達を喜ばせていました。

田植も終わって村の人達は、氏神様の境内に集っていました。この時清太が、「雷がなるときゃピカー、ゴロ、ゴロ、ドシーンと鳴って落ちたときゃー男雷ばい。ピカーッ、ゴロバチ、バチ、ドシーンと音がして、落ちたときゃ女雷だけん。雷が落ちたらすぐ行って見ると、金の卵が落ちとる。そるば拾うたもんは百万長者になつとたい」と言う話をしました。

それから十日あまりたったある日に、南の空が一天俄にかき曇って、ピカーッ、ゴロゴロ、バチバチ、ドシーンと天地も裂ける様な音がして、村の天神森に雷が落ち、杉の大木

が真二つに裂け、白煙がもうもうと立ちこめました。

これを見た人達は、ビックリ仰天して立ちすくんでいましたが、煙が立ち消える頃になると、ようやく気を取りもどしました。

ひよつとすると雷の卵が落ちてはいないかと、おそろおそろいつてみますと、五段重ねの重箱が包んでありますので、これはきつと雷が忘れていった金の卵だろうと、急いで蓋を開けて見たら、タニシの様なものが入っています。

さては雷の弁当のおかずだろうと、二段目を見ますとこれも同じ様にいっぱいつまっています。それでは三段目、四段目と開けてみましたが、同じものばかりです。

最後の五段目を開けようと思いますが、容易に開きません。

いろいろと工夫しましたが開きませんので、みんなと相談した結果、お寺のお坊さんが一番学問があるので、呼んでくることになりました。

お坊さんは、一段の重箱から四段の重箱まで念入りに調べました。そして

「皆さん、これは上から四段目まではへその佃煮です。下の蓋は開きませんが、中身は私にはよくわかります」

ウン、ウンと言うだけで、だまっています。

村人達は不思議がって

「金の卵じゃなかですか、ぜひ見せてください」

と言うと、お坊さんはおもむろに

「へその下は見せられません」

これを聞いた村人達は、しばらく考えていましたが、

「ああそうか」

といってニヤリと笑いました。お坊さんは満面に笑みを浮かべてわが家へと帰ってゆきました。



(語り手 倉岡武政)

彦三と狐のだまし合い

むかしむかし矢部のあるところに、彦三郎という非常にとんちのあるばくろうがおりました。

ある日、馬をひいて狐のいる山のなかを通っていると、古狐が木や草の葉をとって、それにつばをつけているところを見かけました。

しばらくすると、立派な美人になって彦三郎の近くに出てきました。

「おい、別嬪さん、熊本見物に行きなはるなら、この馬にのらんですか」と彦三郎が誘ったら

「わたしや忙しいことはありませんけん、行きまっしょ」と馬に乗りました。

二人は山道を出て、金内、長谷、七滝を通って御船に出て、熊本に着きました。そうして有名な料亭の二階に上って酒盛をしました。

暫らくして、彦三郎は一階に下りて行って、主人と何やら相談していましたが、多額の金を受取ると、さっさと馬に乗って帰りました。主人は

「今日は良い娘が手に入った」

といいながら二階に上がって見ますと、狐の美人は酒をいっぱい飲んだので、前後不覚に寝入って、着物のすそに大きな尻尾を出していました。

これを見た主人は

「おい、みんな来てくれ、この美人には尻尾がついているぞ」

と叫んだので、狐は驚いて一目散に矢部に逃げ帰りました。

狐は彦三郎の仕打ちに非常に腹を立てて、この仇は必ず討つてやるというて、彦三郎の畑や水田に、小石をいっぱい投げ入れました。

ある日、彦三郎は畑の見廻りをして驚きました。畑いっぱい、小石が投げこまれています。こりや困った。きつとあの狐の仕わざだと心には思ったが



「こりや有難い、石肥三年といって、三年に一度糞太を出す。馬や牛の糞太でなくてよかつた。牛の糞や馬の糞を入れてもらうならば困るはずだった。こりや有難い」と何回もいって帰りました。

小石を投げ入れて、彦三郎の泣き面を見るために、毎日木蔭に隠れて見ていた狐は

「これはしもうた。石が糞をするとは知らなかった。今度こそは、牛や馬の糞と取替えで、彦三郎のやつをギャフンといわせてやろう」

といって、眷属けんぞく供を集めてきて、田の中も畑の中も小石を全部拾い出して、馬や牛の糞をドッサリ入れて引上げたそうです。

(語り手 倉岡武政)

雷石の由来

下名連石の川島に、雷石平というところがあります。ここに昔から、雷石といって高さ二米余り、周囲七米位で丁度西瓜を庖丁で切った様に真二つに割れて、広い野原にでんとすわっています。

この石について、昔から面白い話があります。

むかし、むかし、阿蘇地方に非常な大かんばつがあつて何か月も雨が降らないので農作物は枯れ、遂には飲料水さえなくなるようになりました。

そこで健甕竜命（たすいわたつのみこと）が、矢部、竹田、九住、日田、熊本などの近隣の雷達を集めて、夕立をしてもらうことになりました。

いろいろと話し合った結果、矢部の雷は南郷谷を受持つことになりました。元来矢部の

雷は腹が小さくて、大きな仕事は出来ない性格でした。

いよいよ阿蘇の雷のどらの合図で、一斉に始まりました。矢部の雷は先ず立野から始め、河陽、河陰、久木野、中松と威勢よく雨を降らせて、白水村の白川神社まで来た時に、村人達が喜んで出迎え酒や肴のごちそうをしました。雷はつい調子にのって、持ってきた水を全部白川神社の所で降らしてしまいました。

それで、高森や色見村にきた時は既に水はなくなっていました。

高森の鍋かまの平たいらに行つて見たら、大勢の人達が夕立がきたら、体や着物を洗濯しようとして老若男女が裸になつて待つていました。

その中に一きわ目立った美人が、デブソを出しているのが目につきましたので、その美人に飛びついてへそを取つて、大矢野の赤迫へと登つてきました。

一方、阿蘇の雷は、自分の受持ちである阿蘇谷一帯に雨を降らせて、高森方面はどんな状況かと見廻りにきてみましたら、雨はふらさずにこの有様なので、烈火の如くに怒りました。

「矢部の雷め、今にみておれ」

と言いながら大急ぎで高千穂野にあがって見ましたら、川島の上をへそをかついで、大喜びで帰っています。

「へそ盗人待てー」

と天地も裂けんばかりにさけびました。この大声に矢部の雷はびっくり仰天して、大事に持っているへそもろとも雲の上から下界へと転落しました。

そうして、へそは真中から二つに割れて、雷はその下になって死亡して遂に石になったそうです。

それ以来、矢部谷の人よりも阿蘇谷の人の方が、へそも努腹とぼもふといと言われているそうです。



(語り手 倉岡武政)

猪うちの名人

むかし、矢部町に猪うちの名人がいました。今とちがって、昔は鉛弾といって鉄砲の弾は、猟師がみんな自分でつくっていました。

ある晩のこと、家に長いこと飼っている猫が主人のそばに来て、目玉をぎよろぎよろさせながら、主人が作り上げた弾を、一つ一つ脚でころがしたり返したりしていました。

そして弾が十個出来上がるまで続け、最後には人が物を数える様な恰好をしていました。この様子を見た猟師は、不思議なことをするものだなと思いました。長いこと家で飼っている猫なので、別段気にも留めませんでした。

その翌日に、猟師は山に狩りに出かけましたが、獲物が見当らずに、山の奥深くに入っ
て行きました。

「今日は駄目かな」

と一人でつぶやきながら、ひよいと向にある大木を見たら木の股に、何ともかんとも言いようのない怪物がすわりこんでいて、提灯位もあろう大きい目玉をぎらぎらさせて、じつとこちらをにらんでいます。獵師は

「この野郎め、ひとつうちでうち落してくれろぞ」

と一発「ずどん」とうちました。確かに弾は当たったはずですが、怪物には少しもこたえません。こんなはずはないのにもと思ひながら、又二発、三発と次ぎ次ぎに、とうとう十発うち尽してしまいました。

その時に怪物が

「どうじゃ、弾はもうなくなつただらう。おれは、昨日までお前の家に飼われていた猫じゃ。ここから下りて、お前を食べようか、それともお前が上がってきて、おれに食われるか、どちらがよいか返答せよ」

とわれ鐘のような声でわめきました。

ところがこの獵師は、名代の猪うちの名人でしたから懷中に「黒がねの弾」を隠し持つ

ていましたので

「これでも食らえ」

と最後の一発を撃ちこみました。怪物は弾はもうないと思い、防ぎ方をやめていたところ黒がねの隠し弾に額をうちぬかれて、どっさりと地響きを立てて落ちました。それからこの猟師は、弾をつくる時は、誰も知らない所で作ったそうです。

(語り手 倉岡武政)



天神森のおさん狐

水の田尾の瀬戸病院より上の方一帯を狐平といいます。むかし、この付近はすすきの原で、池の窪まで続いていました。

明治の初め頃に、大矢野原は陸軍の演習場になって、くぼ地の所に掘立小屋の兵舎が数棟建てられました。その中央に、大きいトタンぶきの炊事場があつて、多くの人たちの食事をつくるので、毎日沢山の残飯が残ります。

それで、狐や狸、犬などが集まってえさを奪い合うので夜はよく眠られないほどでした。又時々狐が兵隊をだますから、何か退治する方法はないかと、幹部達は頭を悩ましていました。

ある日、演習が終つて兵舎に帰り、人員点呼があつたら新兵の一人が足りません。さあ

—大変なことになりました。隊は数班に分れて村や山に探しに出かけました。

ところが、松林の方で人の歌う声があるので、捜査隊が行って見たらこらどうしたことか？

松の木のそばに、サイダーの空びんやかん詰のかん、木の葉、鳥の糞などを並べて、口から胸のあたりまで馬の糞だらけで、新兵は古い木株に腰かけて、

「主さんぢや、高い所の姫小松、私しや谷間のツタつたかずら、キリキリシヤント、キリシヤント」と歌っています。

ようやくなだめすかして隊に帰り、わけを聞くと

「班長殿が自分を二本木へ連れて行かれたので大きい東雲楼の三階に上り、非常にうまいまんじゅうやご馳走を食べ、素敵な美人の三味線で歌っているところでした」ということです。

昔から、演習場の中程に天神森といって、こんもりとした雑木林がありました。

そこに狐が住みついて相当に数がふえて、その中で年老いた白髪ばかりのめす狐がボスの

おさん狐です。

このおさん狐が人を化かすので、村人達も恐れて誰一人として天神森にはよりつきませんでした。軍隊でも演習にくる度に兵隊を化かすため、遂に天神森を焼き払ってしまいました。

ところが、大変なことになりました。おさん狐を初め今度は三十数匹の狐が暴れだし、野砲隊や騎兵隊の軍馬をだましはじめたので、手の施しようがなくなりました。しかたなく軍隊も、熊本のある偉い僧侶を連れてきて、おさん狐のうらみを静め、焼き払った跡には木を植えて祠を建てて祭ったので、その後何事もなかったそうです。

(語り手 倉岡武政)



河童と相撲をとった古閑武義さん

今から約五十年前、水の田尾村の古閑さんは共同田植で終日代かき作業をして、夕方家に帰ると庭先で

「じいさん、相撲とろい」

と二、三人の子供が出てきて、武義さんにせがみます。

一日中の作業で疲れているので

「何ば言うかー」

とはねのけましたが

「相撲とろい、相撲とろい」

と再三子供からせがまれて、三十二才の男盛り、それに焼酎を少し飲んでいたので元気も

よかった。

「そぎゃん言うなら、相撲とろう」

といって牛を小屋に入れて庭先へ出てきました。

背のだけは五〇糶位であろうか、二、三人の子供達を右や左になげとばしているうちに、数がほとんどんふえてきます。

「ここはせばかけん、川端に行こう」

と武義さんは言いながら、すぐ下の川べりにある倉庫の壁を背にして立っていますと、子供達は何処から出てくるのか、顔はおもちやの「キュービーさん」のようで、

「ぎゃーぎゃー」

とわめきながらむかつてきます。それを片端から手でなぐり、足でけるなどして倒すが後から後からやってくる。体は軟かくて骨はなく海たこのようです。

相当の時間がたって、武義さんの氣勢に負けたのか、どこともなく逃げてしまいました。ひと安心して家に帰りますと

「こぎゃん暗くなるまで、どこにいつとつたな」

と奥さんが聞かれると

「川端で子供達と相撲とっていた」

という。着物はよごれ、所々が破れて肩にも傷があり顔には猫が瓜でひっかいた様になっ
ていて血が流れています

これはただ事ではないと思つて、武義さんを床に休ませました。外は俄雨で、ざんざん
と降りそそいでいます。暫らくたつて武義さんは起き上り

「またあつどんがきたぞ、踏んたくつてくるぞ」

と外に出ていこうとされるので、奥さんと妹さん二人でようやくおさえつけて、寢床に休
ませました。

さつき外に子供達が来ていると言つたが、果して何かきているかと奥さんが窓を開けて
見られるが、何も見当りませんでした。

「あーこんな時には」

とひとりごとを言いながら、茶わんに酒を一杯ついて庭先へ持っていきました。

雨は次第に小降りになり、庭では何やら騒がしい物音がしていました。しばらくして静

かになったので、外に出て見ると、茶わんの付近は何かがずり廻ったようなあとがありま
した。言うまでもなく、茶わんには一滴の酒も残っていませんでした。

河童はよく相撲をとろうと言うが、これに負けると病気をしたり、又は早死するともい
われていますが、武義さんは大勢のものに勝ったので益々元気だということでした。

(語り手 古閑武義)

山わろの話

昔、峯なみに三蔵どんておらした。昔ちゆうてんそぎゃん昔のこつじゃのしでん明治の四十年ぐりゃん時のこつで三蔵どんな、役場やくばア出おらした。酒が好きで役場かりもどらすと毎晩二合半徳利一本ば飲みおらした。そんな酒は九つになる息子が暮れやがちゃ隣り村ん店に買いぎゃん行きおつた。そんな息子も酒好きで、酒ばとつて戻り道イ二合半徳利の口イ自分の口ば当てち、ぐつて一口飲うじ知らん振りばして三蔵どんに渡しとつた。どうかすつと三蔵どんが徳利ば斜めにして徳利ン中ば見て、

「きんじゃあ、いさぎい店んはかりの悪りイ」

て言つとらしたが、そぎゃんときア息子が二口ぐりゃあ飲うじ戻つた時だつた。

そんな三蔵どんな役場ア出おらしたけん時々三里も離れとる浜町イ用事で行きおらした。

島木ちゆう所は馬谷山まやま山城寺尾山じやうじそんな外山かみ中に部落が散らばつとる村じ、そんなころは道ちゆう道ア牛馬うま通るぐりやじそんな上、坂道ばかりでそんな頃もんもんな、そりばあたり前んごつ思うち苦にもせんだった。浜町はまイいく三里の道も同じこつだった。

あつ時、三蔵どんが用件で浜町はまイ行かいたがそんな日は、戻りがおすうなつて暮やがちゃに戻りぎやうつたいた。ところが三蔵どんが馬谷まやの上ん方ん坂道ば降つとらいたりやあった、三蔵どんな魂たま引つくわんぐるごてたまがらしたとたい。そこは山ん横つべりやある下り坂だったが三蔵どんが、今夜んかんみゃんこつどん考えちそんな坂ば下りおらいたりやあんだ、右側ん上ん方かり、ぐわらくくくくって石の瓦んてち落ちてくるけん三蔵どんなうつたまげエち、あぶなか坂道ば身体ば丸うにやアち走りくだらした。音んせんごてなつたけん後ば見てみつと暗かばかり、ゆうと考えち見つと石の瓦んてち落ちたこたアのしでん音ばかりてちわかった。

山わろてちこるがこつだろうて三蔵どんが嫁ごに話しおらすとば、九つの息子は不思議に思うち聞いとつた。

山わろんこたアこつでしみやアばつてん、酒とりのこつがあつとたい。もう暗うなつと

るけん嫁ごが提灯ばさげち息子が二合半徳利ば持って気味の悪い山道ば酒店に行つたが、山わろんこつば思い出アちたいてにやおとろしかつたろうなア。今夜はぐつと一口はやらんだった。

(語り手 中川広海)

不思議な話

今から七十年前も前のことです。島木の峯なみに徳さんという人が住んでいました。徳さんは小柄な年取ったおじいさんで大変心のやさしい正直な人でしたから誰からも、徳さん徳さんとしたわれていました。

徳さんは息子さんとその嫁さんとの三人暮しでした。その息子さん夫婦も大変いい人で農家でしたが、徳さんは外に「状使い」という仕事を持っていました。「状使い」というのは区長さんから他の部落の組長さんに伝える書状を持って行って渡して帰る役でした。

島木は今では一区、二区、三区、四区の四つの行政区に分れていますがその頃は、島木区といって一つの大きな区になっていました。その区長さんの家も徳さんの家の近くにありました。区長さん方にはドラが備えてありました。ドラというのは大きな太鼓のことで

区長さんがこのドラを、ドンドンドンドンと打つと徳さんは、やっていた仕事をやめて急いで区長さん方に行つて書状を受け取つて、組長さん方に届けて帰つて来ると又、しかけておいた仕事をつづけていました。

ある日曜日の午後のことでした。徳さんは昼すぎから小柏原こばらという小さな山道が続いている大川をへだてた川向こうの山の中の部落に状使いに行きました。その徳さんが夕方近くなつてひよこひよここと、いつもの軽い足どりで帰つて来ました。息子と嫁さんが

「もどつたなあ、じいさんきつかつたろう」

と、いうと徳さんは急に元気よくなつて草履をはいたまゝ、畳の上にあがつてきてとても大きな声で、

「俺ア下ん大川ん水神さんぞ、お前たちはここんじいが何べんも川ん中にひやあろてしたつば俺が助けちやつたつば知つとるか。そん思ば知らんとこりからじいが命は助けちゃやらんぞ。思ば知つとるなら小柏原ん渡しい行つてお神酒ば上げ。わかつたか、わかつたか」

と、どなりました。徳さんの目はぎらぎら光っていました。かねてはおとなしい徳さんが

こんな荒いことをいうのは徳さんに水神さんがついていなさるからだと思って息子と嫁さんは、ぶるぶるとふるえていました。息子と嫁さんが

「ちつとん知らんなほんに済んまつせんだった。知らんだつたはどうぞこらえちくどはりまつせ。あした早うお神酒ば上げぎや行きますけん。悪うござりました。どうぞこらえちくどはりまつせ。水神さん、なんまんだぶなまんだぶ」と、顔を畳にすりつけてあやまりますと徳さんは、あちらこちらを見まわして大きな声で、

「おうい、お前たちはがにばかり取って食うて何かつ、もう戻るぞ、こらあ、けんぞくどんなもう戻るぞ」

と、いったかと思うと徳さんは、畳の上に向つぶせになって倒れてしまいました。

息子さんと嫁さんがびっくりして、

「じいさんじいさん」

と、言つて肩に手をかけてゆり起こすと徳さんは眠っている者が目を覚めた時のようにきよとんとした顔で草履を脱ぎながら

「俺アどぎゃんしたつかい、こん草履はどぎゃんしたつかい」

と、たずねるので今までのことを話して聞かせると、

「えっ、そらア小柏原かる戻つとつたつかい」

と、とてもびっくりしたようにしばらく考えていましたが、

「そぎゃん言えば戻りがけ小柏原ん橋——丸太でかけた仮橋——ば渡る時、頭かり水ばかりぶるごつずうつとしたが、そりかるさきア何もわからんだつた。そぎゃんだつたかい、なまんだぶ、なまんだぶ、あしたぬしと二人で早うお神酒とご供くさんば上げぎやいくぞ。今かりいって酒ば取つて来とけ」

と、息子さんに言いました。その時嫁さんが、

「わあ、疊の上んいさぎい濡れとる。水神さんのけんぞくばつれちこらしたけんだろうか」

と、言つて今更のようにびっくりしていたが、それはじいさんの草履が濡れていたためだつたということがわかつて息子さんと顔を見合わせて初めて笑顔になりました。

これは島木でほんとうにあつたお話しです。

聖観世音菩薩指折れの由来

島木の峯にある聖観世音菩薩には右手の人さし指が、第一関節から折れている。この折指のいわれについてはその頃の古老から伝えられたという次のような言い伝えが残っている。

往時はどこの祠堂でもそのお籠り堂はよくかんじん（非人とも、物もらいとも言っていた）のとまり場所になっていた。このお堂もかんじんが一夜の宿に借りていた。実は別に借りていたのではないが昔の人は、情深い人が多かったので、物もらいに来れば食べるものを与えていたし、籠り堂も見ない振りで許していたのだった。

ある晩数人のかんじんが祠堂の籠り堂に宿をとったが、よほど祠堂の観音様のお姿が気に入ったのか又高く売ってひと儲けしようと思ったのか、かんじんのかしらが聖観世音菩

薩を長い籠に移してそれを背負って、部下の者たちを連れて峯部落をあとにしたのであった。それから今の野取の少し先の野原の近道を歩いているうち、観音様を背負っていたかんじんのかしらに急に、激しい腹痛におそわれてしゃがみこんでしまった。別に薬とて用意のないかんじんたちは、腹をさすったり肩をもんだりするだけで、うろく／＼と心配するばかり、かしらの腹痛は増すばかりであった。そのうちかしらは、これは観音様の罰が当たったのだと思いついて籠を肩から外し大石の根っこに斜に立てかけて一生懸命お詫びを言つて、南無阿彌陀仏を唱えていると不思議や腹の痛みがだんだん軽くなつてきた。かんじんのかしらは、観音様はもうこりこりだとそのまゝにして何処かへ逃げて行つた。

翌日観音様のお姿が見えないのでかんじんが持ち出したのだらうという事で幾組にも手分けをしてかんじんの後を追つたが、どこでもそんなかんじんは見受けぬとのことで、たずねあぐんでどの組も一応引き上げてきた。しかし野取の方面に探しに行った三人はまた帰つていかなかった。その三人は野取から吹野へ出て長谷、八勢、上野（茶屋の本）をたずね軍見坂の降り口まで行つて所々方々をたずね歩いて疲れ果て、帰路についたが、その三人が行きに通らなかつた野原の近道を通っていると、道から少し離れた大石の根っこに

何か斜にころがつているのに見あたった。

「あつ、お観音さんだ」

「あら、こぎやんとけおらしたか」

「どうしてん判るて思うち、こけえいつちえたつばいね」

三人は小踊りして喜び、祠堂まで観音様を運んだが、この組が帰つて来るのを待つていた他の組の者は、

「よかった。よかった」

と、手をたたいて喜んだが、上下座前の代表二人の手でお観音様の座に安置して、これで安心と観音様のお姿をよく見ると、右手の人さし指が第一関節からかけて失くなつてゐる。これには皆二度びつくり、早速たいまつをともし大石のところに行つて隈なく探したが見当らないので翌日も野取までの道路を探して見たが発見することはできなかつた。それ以来聖観世音菩薩は右の人さし指が無いまゝに長い年月を過ごされて峯の住民を、お守りくださつてゐるのであつて県の指定を受け、ますく住民の信仰を厚くして今日に至つてゐるのである。

(語り手 中川広海)

狐と猿のだまし合い

昔北中島の旧道路に、だごと峠というところに猿と狐が住んでいました。

ある日狐は、軍見坂から登ってくる行商人をだまして魚かごをうばい、道を歩いていまして猿が出てきて

「そん魚は、どこでとったつかいと尋ねました。

「こりぐりやん魚は、下の堤に一晚はい込みばしておくのとるるぞ」

「そりや、どきやんするとよかつかい」

「お前の尻尾でよか、一晚中つけておくと魚は取るるぞ」

と教えました。猿はこりやよか話を聞いたと喜んで

「よし、おれも魚をうんと取ってやろう」

と早速寒い日でしたがその夜、堤に行つて自分の尻尾をつけました。時々動かしてみますが、何の手ごたえもありませんが、魚つりにも根気がいるだろうと思ひ、じつと我慢していました。

夜中になつて、寒さがだんだん厳しくなり堤の水も凍り始めました。尻尾を動かしてみましたが少しも動きません。

「こりやしもたばい」

と猿が気付いた時は、もうどう引いても尻尾は抜けません。

夜明けになつて、堤のそばの道路を駄賃がたうせが通りかかつて、これを見付けました。

「こりやいかんばい、こんままとくと死んでしまふばい」

と大声で付近にいた人達を呼び集め、猿の尻尾を取ろうとしますが離れません。今度はからだにだきついて、力を入れ引上げましたら、尻尾がぶつとりと切れました。そして引いた反動で、前にあつた石に猿の顔がいやというほど当りました。

猿はこの時から、顔が赤く尻尾がなくなつたそうです。

(語り手 渡辺ノイ)

動物の知恵くらべ

昔ある所に、狐とウズラがおりました。ウズラが狐にむかつて

「あんたは、地獄極楽ば知つとるかい」

「おらノ知らん」

「そんなら、おるが今から教えてやるけん、言うとおらせ」

と言われて、狐はそばの木陰にかくれていました。

しばらくして、村の娘が弁当を持って通りかかりましたが、近づいても逃げないウズラを見て、捕えようと思いましたらポット飛び立ちました。今度は、今度はと思つて追かけますがなかなか捕えられません。遂に娘は弁当を道ばたに置いて追いかけました。

この様子を見ていた狐は、絶好の機会とばかりに出てきて、この弁当を食べてしまいま

した。久し振りにおいしいものをこちそうになって、寝てしまいました。

一方娘は、ウズラを捕えることはとても難しいことを知って、さつきのところまで帰ってきて弁当を探しますが見当りません。おかしいなと思ってふと見ますと、大きな狐が昼寝をしています。きつとこの狐が弁当を食べてしまったことを知り、娘は走って母親を呼んできました。何しろ大きい狐ですから、母親は木工棒でひと打ちしますと

「キャン、キャンー」

と泣声をたてて一目散に逃げていきました。

もう大丈夫と思った狐は立ちどまっていますと、ウズラが出てきました。

「狐どん、この世の地獄と極楽の味はわかったか」

と言いますと

「おれをこぎやんに合わせたつは、お前のせいだ、かみ殺すぞ」

と言つて大きい口でウズラをくわえました。するとウズラは

「一寸待ってくれ、おれとあんな仲のよか友達だったけん、極楽と地獄ば教えるためにこぎやんしたつたい。死ぬる前に一度でよかけん、あんたが声を聞かせちくれ」

とたのみました。すると狐が遠声を立てて

「キヤーン」

と一声鳴く間にウズラは逃げました。そして

「お前がご飯を食べた時はうまかつたろお、そんな時が極楽、木工棒で打たれたときや痛かつたろう、あん時が地獄たい」

とウズラに教えてられて、狐の怒もだんだんとけていきました。そして以前に増して仲のよい友達になつたそうです。

(語り手 渡辺ノイ)

殿様の嫁もらい

ある村に、母親と娘二人が暮していました。姉嬢はまま子ですが知恵があつて母親によく仕え、働き者でしたが、実子はそれと反対に何にも出来ない娘でした。

ある日、朝から雪が降っていましたがまま子は、川になつ葉を洗いに行つていますと、殿様がお供を連れて通りかかられました。この寒い日に川で葉を洗っている娘を見て

「あかみずにこまのつみかたおぼえたか」

とたずねられて

「そう言われる殿様は、こまの足跡おぼえたか」

と返しました。

「これはなかなかの者だ、お前が今少し背が高かつたら嫁にもraitたいがのう」

「奥山のつつじや椿をごらんじゃれ、背は低くとも花は咲きます」

「お前はなかなか利口な娘だ、明日嫁にもらいにゆくので、母親にそういっておけ」と言つて立ち去られました。

娘は早速家に帰りました

「お母さん、あした殿様が私ば嫁にもらいにくるといわした」

「お前がごたつとば、殿様が何で嫁にもらいにこらつそかい」

こう言つたものの、殿様が娘を嫁にと所望されてみれば親は嬉しいものです。

明日早速、実の子にはきれいな着物をきせ、まま子にはぼろ着物をきせて待つていました。

シャン、シャンと駒の鈴の音をさせながら、殿様は供を連れて娘を迎えにこられました。母親と実の子は庭に出て迎えました。

供のものが、盆の上に皿をのせてその中に松を入れてあるのを差出して、

「これを歌よみしてみよ」

実の子はこれに当惑して

「お母さん、何と行ってよかか」

「そぎやね、してあるごつ言うとよかたい」

「そんなら、盆の上に皿、皿の中に塩、塩の中に松」

と答えました。この様子を見て殿様は

「この娘の外にもう一人いるのではないか」

母親はしぶしぶと

「おるこつあおります」

「そんなら、それを出せ」

今まで風呂をわかしていたまま子が出て、丁寧に挨拶をしました。殿様は

「これこれ娘、これを見て、歌を詠んでみろ」

娘はこの盆を見ていましたが

「盆皿や盆皿や、皿の地方に雪降りて、雪を根に育ちますかな」

とおくすることなく詠みました。

「あ、これ、これ」

殿様は大変喜ばれまして、早速風呂に入れて立派な着物に着替えさせられました。そして連れて行かれるので、母親は口おしくて堪りませんのでまま子に

「オイ、オイ、自分のくた茶碗どまあるちゆけ」

「今までは、藤、藤と言われたが、これから先は藤の花かな」
軽く会釈して御殿へと行きました。

(語り手 歌野トシノ)

仲をおさめた白菊の花

昔ある村に金満家で、仲のよい夫婦が住んでいました。これが長く続いていくと何の心配もありませんが、主人が四十才を越した頃から外に女が出来て、奥さんの方にだんだん冷たくなってきました。

何んとかして夫の気持ちを元にもどりたいと、奥さんは日夜考えていましたが、男が一度このみちに踏み込むと、なかなか元の気持ちにもどるものではありません。

ある日のこと、女が主人に

「内の奥さんは今頃、何ばして楽しんどるなはるか」

と尋ねました。

「あー何の楽しみも外まにやなかごたる。今菊の盆栽ぼんざいどんしとるたい」

「そんなら、その菊ば一つ貰てきてくだはりませ」

「とてもやらんどな」

と言うたが、家に帰って奥さんに話すと

「そんなら、あげまつしゆう」

と言うて、菊の鉢に短冊を添えてやりました。

早速女のところに持って行きますと

「これは又立派な菊の花ですなー」とほめはしますが

残念なことに字が読めません

「こりやー何と書いてありますか」

と言われて主人は短冊をとり

「大事な大事なおとせの白菊の花」を読んで奥さんの気持ちにじんとこたえてきま

した。早速短冊を持って家に帰り

「今まで自分が本当に悪かった。どうか許してくれ」

と涙ながらに詫びました。

改心すれば長年つれそつた二人の仲、氷がとけてゆくように元の氣持になつて、楽しい生涯をおくつたということですよ。

（語り手 渡辺ノイ）

オカ寺

昔ある村の庄屋さんの家に、オカという娘が九才から三十三才まで奉公していました。どこの家にも火け木といって、いろりに丸木を絶えず入れておいて、火種を保っていました。

ある年の晩のこと主人が

「オカ、オカ、あと一晩になつたけん、火ば消さんごつせにやいかんばい」

こう注意されましたから、大事に始末しておきましたが朝起きて見ましたら消えておりました。

「こりや、しもたばい」

どうしようかと思つて、庭に出て考えていましたら、たい松をもやしてくる人がいますの

で、この人から火をもらおと待っていました。

「たいへんすみませんが、主人から火け木はすっかりいけとけと言われたが、消してしまおうたけん、火ば分けちくだけはり」

と頼みました。

「火を分けてやつとはよかが、死んだ者ばかりとるけん、もろうてくるるならばわけてやるが」

「はいノもらいますけん」

火をもらったのはよかつたが、死人をもらったオカは大変なことになりました。早速戸口端に菰をかぶせて、急いで火をたきつけて始末をしようと思つていましたが、主人は何時よりも早起起きて、部屋から出てきました。

「オカ、オカ、戸口端に光るものあつとは何か」

「何んでんありまつせん」

「何んでんなかくて、ありや金のたい松たい」

オカは不信に思つて菰を取つて見ますと、本物の金のたい松でした。

「こりや、お前がもんばい。何でんよかけん思うよう使いなはり」
こう主人から言われました。

「そんなら、お寺ば建ようこたる」

オカは、この村にずいぶん長く住んでいるから、この村にお寺を建てて寄付いたしました。しかしまだ金が残っていますので、お室むろを造って出来上がりました。

「この室の中に入れてみようこたる」

と言つて中に入り、そのまま生い仏ぶつになつたそうです。今でも三十三のオカ寺というのがあ
るそうです。

(語り手 歌野トシノ)

うそごころ

昔ある村に大変うそを言う人がいて、村人達を困らせていました、ある日のこと

「火事、火事」

どうなので村の人達が出て見ますが、何にも見えません。

「泥棒、泥棒がきた」

など言つて人々に迷惑をかけますので、村の若者が集つて、このうそ子を俵に入れてしぱり、海に捨てることになりました。

四、五人交代でになってゆきますと

「ハン、ハン、ハン」

とうそ子が言いますので

「どぎゃんあつとかい」

「おら、こん俵の中で死んでしまうけんよかが、寝床んしたに金ば入れとるとが、金が、金が」

若者達は、金を取らるるならばと、俵は道端に置いて走って家に行きました。そして寝床といわず付近を探しますが、金など一つもありません。

この道路は一荷になう商人が多く通りますが、片目の魚屋がうそ子の入っている俵につまづきました。

「だるか、おるばけつたつあ」

「ああ、悪うございました。わたしや片目だるけん、ごめんな」

「そんなら、こん俵の縄ばとけ」

うそ子は俵の中から叱りつけ、縄をとかせて外に出て、

「おるはここで目養生しよつたがもお大分よくなった。こん俵に入ると目はなおるぞ」

そう言つて商人を俵に入れて、元の様に縄で結び、魚の入っているザルをかついで高い山の方に登つてゆきました。

一方金を探しにいった若者は、またもうそ子にだまされたかと、ブン、ブンに怒って帰ってきて見ますと、俵の中にいるはずなのに、魚かごをになって山から下りてきました。

「何かこのくそ坊主、ぬしがおらんごつなつと安心と村の人達が言うどつたに、どぎゃんしたつか」

若者達は全く不思議がつて尋ねました。

「おらそんふのよかつた。片目の魚屋に代つて俵に入つてもろうた」
うそも言い様では、こんなになるものです。

(語り手 歌野義男)

猿とカニの知恵くらべ

昔、猿とカニがある日のこと、もちをついて食べようということになって、二人で田んぼに稲穂を拾いにゆきました。もちをつくにはきねがいりますので、カニが借りにゆきました。

しばらくして、カニが曲ったきねを借りてきました。

「そぎゃん、きねじゃつもらん。まっすぐなやつばかりでけ」
と猿に叱られて、カニはしぶしぶと又きねを借りに行きました。

この間に、猿はよがんだきねでもちをつき、袋に入れて木に登っていました。

カニはきねを借りてきて

「おい、もちやついたとかーおれに一つ食わせ」

と言いますと猿は

「うん、おるがよごだきねで無理してついたけん、だれもくわせん」

カニはどうかして、このもちを食べようと考えました。

「おるげん父さん達ちやね、もちば枝にかけてふるうと、そおん、うもなつと言いよらしたぞ」

そうかなーと猿は、もちを枝にかけてふるいましたので、すぐに草むらに落ちました。

木の下で待っていたカニは、すぐそばの穴の中に引き入れました。

「こりや、しもうたばい」

と猿はあわてて、木から下りてきました。

「おい、おれ一つくわせんか」

「ばか、お前がさつきやりばつしたか」

二人はしばらく争っていましたが猿が怒って

「よし、お前がくわせんなら、こるば見とけ」と穴の中に「ウンコ」をしこみました。

このやり方にカニも興奮して、猿の尻をしゃっかとはさんで放しませんでした。

今もカニの足に、猿の毛のようなものがついてるのは、この時からと言われています。

(語り手 渡辺ノイ)

ねずみ

昔ある村に、心のやさしいおばあさんが、川にいもを洗いに行つて帰る時に、ざるからいもが一つ落ちてそばの穴に入つてしまいました。

そうしたら、

「いもころりん、いもころりん」

と大変調子のよい音が聞えてきます。おばあさんは面白くなって、いもを一つ、二つと入れますと益々よい音が聞えてきますので、とうとう自分が穴の中に入つてゆきました。

ところが中はとても広くて、大勢のねずみ達が

「猫さえおらねば、世の中、世の中」

と言つて調子よく米をついでいます。おばあさんは

「お前たちやー、そぎゃん、猫がおそろしいかい、そんなら、おるが猫の通らんごつしてやろう」

これを聞いて、ねずみ達は大変喜びました。

「そんなら、ここにある品物は何でもあげます」

おばあさんは、ねずみ達から沢山な土産物をもらって、家に帰りました。

翌日、隣りのおばさんのところに品物を持って行ってこの話をしましたら、欲の深いおばあさんは早速穴の所に行きました。

そして言われた通りにいもを入れますと、

「いもころりん、いもころりん」

と音が聞えてきましたので、欲ばりのおばあさんは早速穴の中に入りました。ねずみ達は米つきをしていましたが、

「おばさん、今日もきたね、そこにすわって、煙草でも飲んでいなはり、おれたちや米ばつくけん」

言われる通りにすわって周囲を見ますと、珍しい物が沢山置いてあります。これをうま

い具合にだまして、持ってゆこうと思って

「ミャオー」

と猫の鳴き声をしましたら、ねずみ達は皆んなどこへか逃げてゆき、この騒ぎで真暗になりました。さすがの欲ばりばあさんも仕方なく、穴を探しますが見当りません。

ようやくのことで穴の所に行き、上がろうとしましたら、家の息子が来て

「昨日大根ばまいたばっかりに、もう、もぐらが盛り上げよる」

と言って、大きい木づちで力まかせにうったのが、ばあさんの頭にあたって、そのまま死んでしまいました。

ばあさんが欲を出して掘ったのは、自分の畑だったそうです。

(語り手 渡辺ノイ)

伝説

京の上臈と女畑

矢部町の牧野に、京の上臈と女畑というところがあつて、平家についての伝説があります。

昔、壇の浦の戦いに敗れた平氏は、源氏の追手をのがれて、深山に隠れていきました。この公達を慕つて京から女房や恋人達が、はるばる牧野までたどり着きました。

そして、道端の農夫に

「内大臣という所は、これからどのくらいありますか」

と尋ねますと、

「これからまだまだ、万の坂を越え、千の滝、七里の橋を渡つてゆかねばなりません」
今まで数百里の道を歩いてきたのに、これから先がそんなに遠くさらに、一門の方々も



すべて滝に身を投げたといううわさが
伝わりました。

これを聞いて、もう気力をなくしや
るせない悲恋の情から小高い丘に登っ
て、遠か内大臣の峰々を仰ぎつつ、石
に化してしまったという。

現在立ったような姿、座ったような
形の石が、昔を物語るかのように居並
んでいます。

その北側に女畑という所があります
が、ある人が夜中にここを通りますと
道端に女が一人手ぬぐいをかぶってい
ます。こんな時刻に女がと、こわこわ
近づきますと、女が頭を上げて、「に

「い」っと笑いました。

その瞬間、頭の髪が一本立ちして、体がぶるぶるふるえ、手も足もかなわなくなってしまいました。どこをどう歩いたか、家に帰った時は、ひじと足のひざは血だらけだったそうです。

平家の伝説を秘めた内大臣

緑川の支流である内大臣川の流域は、うっそうとした原始林と、奇石、怪岩が配列して訪れる人を楽しませます。

ここは寿永の昔、壇の浦で敗れた平家の落武者や公達が、はるばる丘を越え谷を渡って、この地に隠れたということが伝えられています。

また一説には、平家の没落前に小松内大臣重盛が、うるさい世俗をさけて、この山にちつ居されたので「内大臣」という名があるともいわれています。

その遺跡として、館の原、連歌堂、寺屋敷などの跡が山の中に残っています。

お山の中腹にある小松神社の大祭は、毎年四月四日で沿道は参詣する人達で大にぎわいになります。



また御廟というところがありますが、これは寿永四年（一一八五）安徳天皇入水といつわつて、平家の落武者たちが幼帝を奉じてこの山に入りました。そして、この山の元首と仰いだ遺跡の一つと伝えられています。

又中尾には、「御前の墓、平家武將の墓」の言い伝えられている土盛があります。御前の墓というのは、内大臣や五家荘一帯に住む平氏一族を統率した、平氏の直系重盛の三男、平清経、外の一つは弥平兵衛宗清の墓ではないかと伝えられています。

笈石と菅の由来

昔、弘法大師が諸国を巡られた時に、鮎の瀬の溪谷を通って坂道を登り、笈石部落の入口に着かれると、大きい声を出してけんかしているものがあります。大師は誰が言い合いをしているかなーと周囲を見られると、なんと部落の南側に高く聳えている大岩同志でした。

大師は岩に近寄り、

「あんた達はなんで言い争いをしているのですか」

と尋ねられますと、大きい岩の方が

「おれの方が、お前よりも背が高くでずっときれいだぞ」

と言ったら、低い方の岩が

「あんたは何ね、背は高いが何のとりえもない。私の素肌を見て、体に太陽が当たると鏡

の様に輝くと、向い方の小ヶ蔵村の人達は言っているよ」
とお互いに譲らずに口げんかをしているという。

大師さんは、両方の言い分をよく聞いて考えられました。大きい岩は身長十五米位の巨体でよく見られると男岩です。一方背の低い方はなる程肌がきれいな女岩です。

これはしめたと思われて、

「あんたがたは、自分の自慢ばかりして相手の方のよさを見ていない。今一度見直してみなさい」

ときびしく叱られて、二人共うなだれました。大師は

「私が見たところ、男と女の様だが、けんかするのも仲のよい証、どうだろう」

と両方の手を取って永い契の握手をさせられました。

争いが転じて福となる。何時の時代にも仲介の人が必要です。この夫婦岩は一年に一度ひとつの岩になるので、中を通る山道が使えなくなるという。そのためでもあろうか、岩のそばに、高さ七米位もある子岩と、それより少し背の低い孫岩とがでんと座って大空を眺めています。



大師は笑みを浮かべながら坂道を下り、背おつておられた笈を、道端の大きな石の上におろして休息されました。

笈とは山伏などが仏具、食器、本などを入れて背負う足付の箱のことです。

こうしたこと、笈を下した石ということで「笈石」と呼ぶようになり、それが村の名称になったそうです。

それから大師は上菅へと行かれましたが、途中の道端にしばらく休まれました。しばらくして、空が曇り暑くなりましたので、つい、うっかり今までかぶっておられた菅笠を忘れて、立ち去られました。

その後、この菅笠から芽が出て茂りました。村人達は不思議がっていましたが、この僧が名高い弘法大師とわかりましたので、垣根をつくって大切に保存いたしました。それからこの村を、菅と呼ぶようになったそうです。

(語り手 東 常武)



御所塚

御所大矢の国有林の中にある古墳です。

昔、景行天皇が大矢山の麓に行宮を設けられたので、王屋山とも伝えられています。現在その付近に上御所、下御所、大道などの所がありますが、巡幸の際に一時滞在されたところと言われています。

また「ゴミサギ」と言って、樹木がうっそうと繁っている中に、三基の古墳があります。二基は円墳で中央のが最も大きくて、ひさごの形をしています。

これはいずれも人工的に、周囲を掘って盛り上げたもの

ですが、文献も出土品もなく立証出来ませんが、地元（ニッポン）に伝えられているところによれば、景行天皇の御陵（ミマ）ではないかと言われています。

大矢山

大矢野の山頂で、標高八九九、五米あります。

昔、ここには老樹大木が生い茂っていて、猛獣や野鳥類が繁殖して、付近の里人に大変危害を与えていました。それで健盤竜命が、人々の辛苦を救うために「イノシシ」狩りをされて、天下泰平国家安全のご祈禱をされたと伝えられています。

またこの山は、命が狩りをされる時に、大きい弓に大矢をつがえられたので「大矢山」と名がついたといわれています。

成君の逆椿

現在四十五戸の村ですが、小差に行く道端に不思議な古木の椿があります。木の芽も花も逆さに咲くと昔は言われていました。

この椿は昔、健甕竜命が白谷川のそばで折取られ、それを杖にやつこのことでここまでたどり着かれた命は、道ばたに突立てて一休みされました。

すると美しい姫が現われて

「道なきところを踏みひらいて、この地へおいでになったのは、ただの人ではありませんまい。ぜひともこの地の君になってください」

と懇願いたしましたので、命はその椿をそのままにしてしばらくこの地にとどまりになつたと伝えられています。



道ばたの椿は自然に根を張り、逆枝に栄えたのでその名が有るといわれています。

またこの村を成君と呼ぶのは、命がしばらく滞在されて地区の人達を教化されたとも言われています。

日暮崎・稲生原・男成の由来

日暮崎

この村は戸数一一の小さい集落です。

昔、健盤竜命が見立山を望み、深山を踏み分けてやっと山の麓にたどりつかれた時は、日は落ちて、たそがれの頃でした。それでこの地を日暮崎と呼ぶようになったと伝えられています。

稲生原

昔、健盤竜命が見立山麓の山野を開き、田畑を耕して農耕を広められた時に、最初に稲

が稔ったのでこの地を稻生原と呼ぶようになったそうです。現在一八戸の農家があります

男 成 村

この村は現在二五戸ありますが、昔阿蘇氏が矢部在城の時に氏神として祭祀（素戔鳴尊、奇稻田姫）した頃、阿蘇惟義がこの神社で元服の札を行って以来、代々その儀式が行われるようになりました。

こうしたことで、参道付近の村を男成と呼ぶようになったそうです。

梅木にあつた駆込寺

梅木部落の裏山に、昼でも暗いほど繁った杉山の中にしめ縄を張った古い塚があつて、ここに昔、関所院というお寺があつたそうです。

関所院というのは、俗にいう駆込寺（別名縁切り寺ともいう）で、女性が非常に困り苦しみ果てその解決のしかたとして、寺にかけ込んで助けを求めたところだ。

この寺について、記録も伝承も少ないので、駆込寺の由来などについて考えてみます。

弘安七年（一二八四）北条時宗が三十四才でなくなりましたので、奥方の覚山志道尼が菩提を弔つて尼となり東慶寺というお寺を建てました。この寺が駆込寺で縁切りという寺法を創立したといわれています。

東慶寺の記録によりますと、覚山尼の言葉として、

「女と申すものは不法の夫にも身を任すことが多い。そうすると、女の狭き心にてはふと邪の思い立ちで、自殺するものが出てくる」

その時は寺に駆込むと、特別の力によって助けるといふ寺法をつくつたのです。

そして、この寺法が江戸時代まで続きました。特に嘉永、安政の頃になつて、外国人が日本に渡来して男女同権の風潮が影響もして、駆込寺が東慶寺だけでなく、全国各地方まで出来るようになりました。そこで梅木の寺もこの頃に建てられたものと思われまふ。

つぎに、どんな理由で駆込んだかその例を挙げてみますと、

イ、結婚を強要された。

ロ、夫の不法を九か条書いて訴えてきた。

ニ、姑との同居がいや、別棟を要求。

ホ、遊女奉公を強要された。

ヘ、他に男が出来て駆込んだ。

まだ多くの理由で駆込んだ記録がありますけれども、以上のことから考えまして、女性が離婚権がなくて、如何に弱い立場にあつたかがわかります。

女性が困ってもすぐには寺には駆込めません。寺のそばに寺役人がいて、いろいろ取調べをしたり、又調停や連絡等もおこなわれていたそうです。

関所院跡のすぐ下が金井満さん宅で、ここが寺屋敷と呼ばれていますから、寺役人のいた所とも考えられます。

矢部にもこんな駆込寺があつたかと思ひますと心の寒くなる思いがします。それと同時に、今までこの寺があつたならば、駆込むのは女性ばかりではなかつとも思われます。



弘法大師杖立の井戸

北川内部落から徒歩で約二十分、間谷山に登り八合目余りのところに中山という村があります。最近まで二、三軒の家がありましたが、生活に不便なためか山をおりて、今はわびしく空家が残っているだけです。この家のそばを通過してゆくと、畑のすみにきれいな水がわき出ています。これが由緒ある井戸です。

昔、弘法大師が諸国をまわられた時に、この中山村にこられました。何しろ急な坂道なので相当に疲れられ道ばたの家に立寄りられて

「ごめんください」

と案内きこわれると、老婆が出て迎える。

「旅の者です、のどがかわきましたのでお茶を一杯いただきたいですが」



と言われると、老婆は

「それは大変お疲れでした。しばらく待ってくださいと言つて、竹筒を持って出ていきました。

それから相当な時間がたつてから老婆が帰つてきて、お茶を沸かし始めました。大師も不思議に思われて、

「お婆さん、家の近くには井戸はないのですか」

とたずねられると、老婆は

「はい、この村には井戸がありませんので、下の川から汲んできました」と答えました。

大師は、この年老いた身でありなが

ら、一介の旅の者に対して、遠い川まで行ってお茶を飲ませてくれた親切にいたく心をうたれられました。

大師は老婆を伴なって家の付近を探り

「ここを少し掘りなさい。必ず水が出ます」

といって、地面に杖を立てて去られました。老婆は言われたとおりに掘ると、勢よく清水が湧きました。

老婆は勿論のこと、部落の人達も大変喜びました。後でこの僧が有名な弘法大師とわかり、なお大切に使用しました。

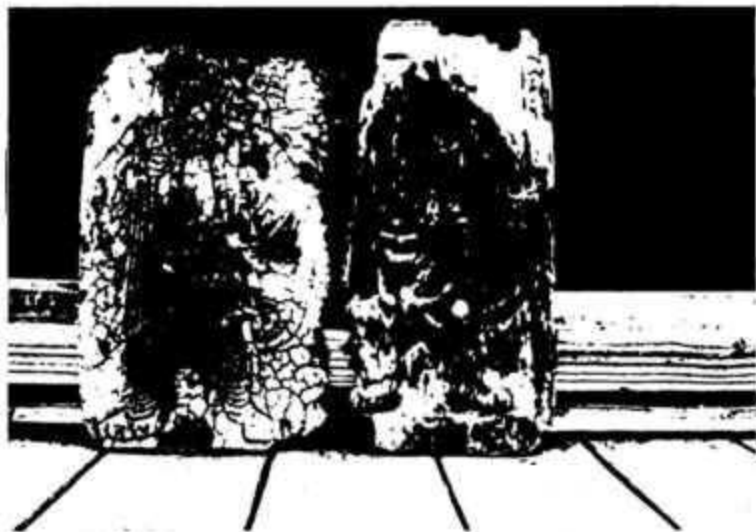
柚木についての伝説

柚木の黒さんは、各家庭に幣物へいぶつが配られて矢部の人達に親まれています。

むかし旅の僧が柚木村にこられて、ある家に泊られました。主人は勿論のこと、家族全部が心から旅の人を歓待しました。大師は家の様子から見て、貧しいのにもかかわらず心からのもてなしに、深く感激されて柚木ゆきのに自ら大黒天を刻まれました。そして主人に

「これは大黒天の像ですが、これを紙にすって人に配ると、受けた人達も世の中の災害から免れます。又あなたもみんなの報謝を受けて、貧困から免れるでしょう」と言つて立ち去りました。

それより大師の教えにしたがつて、大黒天の像を紙に模し、広く人達に配布するようになりしました。



あとになって、この僧が有名な弘法大師と
わかり、部落の人達も大いに感激いたしまし
た。

こうした由来にもとずいて、村の名称も柚
木村とよぶようになりました。

鬼がきて廻す巡石



十田里部落から池の窟へゆく旧道路端に、大きい石が二個重なって立っています。これが「巡石」と言われています。

大きい台石の上に、幅二米、高さ二米三〇厘の大きい石が、昔からの言い伝えによりますと、毎年大晦日の晩になると鬼が来て、この巨石を廻すそうです。

近づいてよく見ますと、何回か廻されたとみえて数か所欠けている所があります。

又未婚の男女がこれに石を投げて台石の上のると、良

縁が得られると言われ、数百個の小石がのっています。

このためでもあろうか、北中島地区の夫婦は、大変仲がよく家庭が円満と言われている。
す。

(語り手 歌野 栄)

小松の塔

大矢野原山頂の黒岩というところに、高さ六〇程余りの五輪塔があります。これは平家没落の時にその一門が阿蘇外輪山である大矢野原を通る時に、重盛の姫がここで死去されたので葬ったと言ひ伝られています。

(語り手 吉本政行)

千人塚



北中島の相月原に、直径八米以上の盛土があつてこれを千人塚と呼んでいます。

この地は数回戦いの場所となり、年代不明の戦死者を合葬した跡と言ひ伝えられています。

この地は別に「矢つき原」とも呼ばれています。戦いがあつて矢がつきはて、多数の戦死者があつたのでその名がつき、後になつて相月原となりました。

一説には、小西行長が攻めて来た時の戦であるとも伝えられています。

(語り手 歌野 栄)

あとがき

郷土に古くから語り伝えられてきた昔話と伝説が、今忘れかけようとしています。

この昔話と伝説は、私達の先輩が貧しさの中にも自ら語り伝えてきたものです。

こうしたとうとい文化遺産をまとめて「矢部町文化財第三集」として、紹介することになりました。

村々に残っている昔話や伝説を、調べてまとめることは、なみ大抵のことではありませんが、先輩や関係の方々のご援助によって、この冊子が出来上りました。

ちなみに「地域の方言を守るために」一、二編全文を矢部方言にしてありますのでご愛読ください。

文化財第三集

矢部町の民話と伝説

昭和五十六年三月三十一日印刷

昭和五十六年四月一日発行

矢部町教育委員会発行

上益城郡矢部町字瀬貝

印刷 ヨシイ印刷